

プロローグ 事故で死んでしまったわたし

「ちょっと！ こっちはもう1時間も待ってるんだ！ いつまで待たせるんだ！」

怒鳴り声に一斉に来庁者がわたしたちの方を見る。この時間帯の市役所の窓口はいつも混んでいる。

「すみません、皆様順番にお待ちいただいていますので……」

わたしはひたすらに決まりきったセリフを繰り返す。もはや心は麻痺している。申し訳ない気持ちがないわけではないが、心を寄せるところ

らが疲弊して壊れてしまう。申し訳なさそうな表情と声で取り繕って、処理を進める。

（わたしの仕事、誰の役に立ってるのだろう）

開庁時間内はひたすらに窓口業務で謝罪をし、閉庁後は来庁者対応で滞っていた業務を片付ける。残業は奨励されていないが、人手不足もあってそうも言っていられない。繁忙期の三月は残業続きで終業は22時を過ぎていた。

（思い出すな、震災対応のときはもっと残業多かったっけ）

ふと、駅の鏡が目に入る。無難なファストファッションを着ている自分の姿が映る。

（洋服……。毎日疲れていて無難な組み合わせを繰り返すだけになってしまった……。コーデ組むの好きだったのにな）

通勤電車は片道30分。ピークを過ぎているが座れる席はない。慣れた手つきでスマホのアプリで読みかけの小説の表紙をタップする。

ほとんど読み終わるところだった。もうすぐ最寄り駅に着く。電車を降りる前に読み終わりそうだ。

（ハズレだったな……。なんか都合よく丸く収まって入り込めなかった）

現実を忘れたくて、読んだはずなのに登場人物が苦勞せず幸せになると肩透かしに遭った気がする。ただ、挿絵は綺麗だった。特に主人公の勇者とヒロインの衣装は素敵だったと思う。

（いいな、小説の世界は。やりがいのある役目と大切な人がいて）

家族と仲が悪いわけではない。いたって普通。恋人は十年以上いない。同級生の結婚ラッシュの時には多少焦ったが、それもずいぶん前の話だ。もはや恋愛に興味を失っていた。イケメンに興味がないから流行の推し活もしていない。

（わたしも小説に文句ばかりで性格が悪いな。明日からは他の本を読んでみよう）

電車を降りて道を歩く。横断歩道を歩いていると、減速せずに侵入してきた車のヘッドライトが視界の端に入ってきた。

（危ない――）

そう思った瞬間に視界が白で埋め尽くされた。

（誰の役にも立たない人生だったな――）

わたしは意識を手放した。

第一章 転生したわたしと破滅回避のための初めての夜

目を開けると、わたしは倒れていた。毛足の長い絨毯が敷き詰められた上なので痛くはない。

（いつの間に室内に？）

体を起こして辺りを見回すと壁に地図が貼ってあるのが目に入る。立ってみるが体中どこにも痛みはない。

（事故に遭ったのではないの……？）

そのまま地図の方へ歩いていく。大きさは片手の長さほどで紙質は古ぼけたような黄ばんだ色だ。

地図は見覚えのある世界地図とは違った。中央に大きな島が浮かびそれを取り囲むように数十の島がある。ヨーロッパの一部を拡大したような印象の地図だ。

（あれ、何か見覚えがある？）

「ああっーーーーー！」

思わず叫んでしまった。

「これ、あの本の地図と同じだわ……」

そう、記憶の途切れた日に読んでいたファンタジー小説。登場人物紹介の次のページは国の地図だった。その架空の国の地図が壁に貼られている。

（熱狂的なファンのお宅？　ってそんなわけない。あの本はグッズがでるほど売れてない）

さらに見回すと壁に掛けられた鏡を発見した。絵画みたいな大層な額に入っている。わたしの家の鏡にはスタンドはついていないが、枠なんてない。顔に怪我をしているかもしれないし、確認しなければ。慌てて鏡に歩み寄った。

（なんか視界が低い……？）

違和感があるが、今はそれどころでない。鏡の正面に立ちしつかりと覗き込む。

「ええっ！ 何これっ！」

思わず叫んでしまった。透き通るような長い銀髪と青い瞳の美少女がそこにいた。

「えっ、どういうこと？」

自分の顔をぺたぺたと触れてみる。その動きと同様に鏡の中の美女が動く。モニターに映った映像などではない。独り言で発した声も聞き慣れた自分の声ではない。高くて、なんというかアニメの美少女声なのだ。

「これって——」

本の内容が頭を駆け巡った。

魔王が降臨した世界。勇者が護衛の騎士団長と共に魔王を討ちに行く話。途中、勇者は大けがをするけれど癒しの力を持った聖女が治してくれて——。

聖女。そうだ、聖女だ。銀糸のように繊細でつややかな長い銀髪に海のように深い青の瞳。癒しの力で怪我や病気を治す力を持ったキャラクターだ。その造形そのままの美少女がそこにいた。

（転生ってやつなの？　ちょっと待って、よりによってあの本？　い

や、戦国時代物とか密室殺人ミステリーとかよりマシだけど……）

現世で死ぬ前に毒づいていたことを思い出す。都合よく丸く収まった、そのために都合よく動かされた登場人物の筆頭ではないか。

（聖女ってとんだかませ犬のご都合主義キャラだった。詰んだ……）

途中で癒しの力に目を付けた魔王に攫われる。洗脳されて寝返って、最後には勇者一向に討たれるのだ。鏡に映った自分を見つめ続けたら、あることに気づく。

（って何この服。聖女じゃなくて痴女じゃん）

バニーガールのようなレオタード。腹部はダイヤ型に大きく切り抜かれ胸の下の輪郭部分、いわゆる下乳とヘソが見えている。パンツが数センチ見える丈のミニスカートのニーハイソックスを履いている。

（そしてまあ、胸でつか。グラビアアイドルみたい）

申し訳程度に聖女要素入れときますんと言わんばかりに装飾で縁取られたスケスケの薄いベールを羽織っている。

（そうだった、あの小説の挿絵の聖女はこんな服装だった）

どう考えても聖女じゃなくて露出狂だ。読んでいるときはたいした違和感はなかったが、実際自分が着ているとトンチキっぷりが凄まじい。勇者とヒロインの服装がまともだったから見落としていた。

（そうだった、かませ犬キャラに加えて、お色気要素まで盛られてたんだわ）

聖女なら肌を隠せ。魔王が襲ってくる可能性があるならなおのこと肌を守れ。

ツツコみつつ、マシな服はないかと、聖女の家を引き出しをひっくり返してみる。探しても探しても全く同じ露出衣装が何枚も出てくるばかりだった。

（狂ってる……。わたしの人格が入る前の聖女とんだ狂女かも……）

諦めて露出狂のような初期装備で部屋の外に出てみる。わたしが倒れていた部屋は小さな小屋で外壁に囲まれた敷地内には教会がある。

教会の敷地を抜けて、通りにでてみる。洗濯物を抱えた侍女らしき女性に声を掛けられた。

「おはようございます、聖女様。良いお天気ですね」

（言葉……通じるのね）

「そ、そうですね」

その後、数人と立ち話をした。誰も服装にも人格が変わったことについて言及してこなかった。

（おかしい、誰も避けてこない。わたしが近所で会ったら絶対通報するのに。じゃなくて、中身が変わったことに気づく人はいないのね）

部屋に戻った。さて、これからどうするか。前世のわたしが交通事故に遭って死んでしまったのなら、もとの世界へはきっと戻れないだろう。

戻れないのなら聖女として生きるしかないが――。問題は作中で不幸な最後を遂げるキャラクターであることだ。

（前世だって、碌でもない死に方をしたんだ。せつかく転生できたんだし。ちよつと変わってるけど美女になれたんだし。また死んでたまるもんですか）

やけっぱちになって、この世界で生きる決心をする。そうと決まれば情報収集だ。

何より聖女であるわたしの破滅を回避する方法を知りたい。

（力があるんだから魔王に勝つ、というのは無理だね。この聖女の力は回復専門だものね）

攫われてしまったら、そこから逃げるといった改変は難しいだろう。

魔王から目をつけられない方法。魔王は自分の一族を聖女の癒しの力で回復させようとして、攫ったのだ。

（どこかへ隠れて目立たないようにする……のは間に合わないわよね。さっきも聖女は村人に広く顔が知れ渡っていたわ）

色々考えても癒しの力がある限り、破滅エンドが避けられそうになり。そこでふと思いついた。

（だったら、聖女の力をなくす方法はない？）

聖女の部屋の本を手にとってみる。

（あつ、この国の本読める……！）

部屋中の本を片っ端から読んだけどそれらしき方法は書いていなかった。

（しょうがないわね、町の人に聞いてみよう。何かわかるかもしれない）

教会の敷地を出て、小道を少し歩くとかなり大きな通りに出た。新鮮な果物や魚介類を売る露店やレストランなどの飲食店もあって賑わっている。

ちようど酒場から出てきた少しガラの悪そうな三人組の男性に声をかけられる。

周囲を見ても今のわたしの姿ほどの美女はなかない。声がかかるのは当然かもしれない。せっくなので聞きたいことを聞いてみる。

「聖女が力を失う方法？」

「誘ってんのかい、巨乳の聖女様。そんなの処女喪失に決まってるだろう」

（本当にこの本はしょうもないな。処女でなくなっただけで何が変わるっていうの）

前世のわたしは処女の時も処女喪失後も特に何も変わらなかった。

そうは言っても、この世界ではそういうルールなのだろう。

「ありがとうございます。では」

踵を返す。追い縋った男の一人が肩に手をかけてわたしを彼らの方へ振り向かせる。

「待ちなよ、処女なくしたいんだろ？　俺らが手伝ってやるよ」

手首を掴まれて強引に体を引き寄せられる。このまま連れ去られてしまふのだろうか。

能力を失えるのは好都合だが、乱暴にされるのはごめん被りたかった。これだけ美女なのだから引く手あまたのはずだ。他をあたりたい。

（でも、どうすれば——、わたし、癒しの力しかない——）

「お前達、何をやっている」

高い場所から男らしい低くて張りのある美声が降ってきた。現代で言えはイケボってやつだ。

「邪魔するなよ、って騎士団長ヴェルナー様……！」

男達が驚愕と恐れを抱いた表情で叫ぶ。

「この国の女性はすべて俺のものだ。お前達の出る幕ではない。下がれ」

不遜な物言いだが、漆黒の馬に騎乗し、美麗な甲冑に身を包んでの自信に満ちた言葉には無駄に説得力がある。

装いだけでなく、何より目を引くのは血のように真っ赤な美しい長髪だ。見る人を威圧するような髪色の印象を和らげるのはエメラルド色の瞳だ。瞳が優しく人懐っこい印象を与えている。間違いなく美青年なのだが、ひょうひょうとした雰囲気が只者ではないと物語っている。

この国の女性がすべてこのヴェルナーという男のものであるということとは少なくともわたしは同意できない。が、助けてもらっているようなのでここは黙っておく。

「お前達、その腕章、末端だが俺の隊のものじゃないか。いつから我が国の騎士団は女性を害する存在に成り下がったんだ？」

一見すると人懐っこい男が目を細めて、威圧すると寒気がするほど恐ろしい雰囲気を漂わす。

「す、すみませんでしたっ、おい、逃げるぞ」

蜘蛛の子を散らすように男達は人混みに逃げていった。

（助かった。あんな奴らに抱かれるなんてまっぴら。それにしてもこの人って――）

気づくと騎乗した騎士団長とわたしを群衆が取り囲んでいた。

「きゃーっ♡ ヴェルナー様♡ 素敵♡ こっち向いてえ♡」

「ヴェルナー様、これさっき焼きたてのパンだ。持っていておくれ」

「うちの果物もぜひ、とれたてのリンゴだ。美味しいよ」

わたしとしては口が軽く胡散臭いとは思っているが、村人たちにはとても人望があるようだ。たちまち、鞍上が貢物でいっぱいになる。

「我が国の宝、癒しの聖女様。ご無事で何より。ただ、人が集まってきた。ここは一旦抜け出そう」

そういうと、馬上から降りて手綱を引いていたヴェルナーに抱き抱えられ、馬上に上げられた。軽々とした身のこなしで彼も騎乗する。後ろから包み込むように支えられ、馬が走り出す。

香水ではないが何やら魅力的な香りがする。

（何？　すごくいい香りでクラクラする……）

一瞬、上の空になってしまった。気を取り直して乗馬に集中する。軽快な騎乗に揺られながら、記憶を手繰り寄せる。

騎士団長、確か勇者に同行し、聖女と一緒に魔王を討った存在。作中では女好きでモテモテだった。

（ん？　女好きなら後腐れないし、慣れててスムーズに抱いてくれそう。もしかして適任なのでは？）

そうと決まれば、今すぐ仕掛けなければ。聖女が魔王に攫われてしま
う。

「イタタタタ……。お腹が痛いよー。わたしの家は遠いんですー、団
長様のお家へ連れて行ってくださいー」

自分でも下手な芝居だとは思ったけれど、なりふり構っている暇はな
い。

「いや、あなたの住んでいる教会はすぐそこだろう、うちより近いぞ」
（ぐっ、正論だ。でもなんとかしてここは騎士団長の家へ転がり込みた
い。教会に男性を連れ込むのは無理だ）

「えーん。帰ったら、神父様にこき使われるんです。痛みが治るまででいいので休ませてください」

「いやいや、人格者で有名な神父様に限ってそんなことは……。ふむ、仕方ないな、何やら事情がありそうだ。話を聞こう」

さすが察しもいい。女性にモテるはずだ。

そんな流れで、なんとかわたしは騎士団長様の住まいへ転がり込んだ。騎士団長といえば、この国の数万人から成る騎士団の頂点のたった一人。女好きとのことだし、さぞかし部屋も豪華かと思っていたのだが。上質な造りであることは間違いないが、無駄なものがなく、あまり生活感のない部屋だった。

（現代風に言えばミニマリストってやつかしら）

「大したものはないが」

そう言って、グラスに赤ワインを注がれる。

（ワイン？　そういえば昔は水の方が保存が効かなくて貴重だったとか）

手綱は彼が操ってはいたが、確かに慣れない乗馬をして喉は乾いていた。騎士団長の騎乗は素晴らしいものだったが、気が張っていて疲れたのかもしれない。

（前世ではザルの異名を取っていたわたし。赤ワインは大好物だわ。早速現地のお酒を飲めるなんてラッキー）

ぐいっと一気に飲み干す。

「おい、大丈夫か。そんな一気に飲んで」

「へーき、へーきってあれ？」

急に脈拍が速くなり、顔が熱い。おかしいな、一杯くらいで酔うはずなんてない。

（あつ、もしかして聖女様の体はお酒に弱いのか？　しまった、いつもの勢いで。まずい、酔ってしまう）

酔って意識をなくす前に言わなければ！ 騎士団長の胸ぐらを掴んで引き寄せる。

「騎士団長様、お願いですっ！ わたしの命を助けるためにセックスしてください！ 一度でいいんで！」

「何を言ってるんだ、俺に抱かれないからって。そんなとんでもないことを言ってきた奴はいないぞ」

今までありとあらゆる言い寄られ方をされた人間の言い方だった。

「ひょんとーなんです！ よ、予知の力が目覚めたんれす。わらし、まおーにさらられるんれすう！」

呂律が回らない。だけどこっちは必死だ。生死がかかっているのだ。

「とにかくだ。国の宝の聖女を汚すなどできるはずないだろう。それに俺は年下は好みじゃない。年上の色っぽい未亡人がいい」

『年下は』と言った瞬間に不敵な彼の顔が一瞬曇った気がした。しかしわたしも必死でそれには触れる余裕がない。とにかく食い下がる。

「そこを何とか！ 色気と言えわたしおっぱいは大きいれす！」

ペールを捲り上げて、胸を寄せて谷間を作って騎士団長の眼前に近づける。

「しまえしまえ。……そういう慎みがないのは色気がないって言うんだ」

「そんなあ……でもらって、あの……」

そこから記憶が途切れた。たった一杯のワインで酔って眠ってしまったのだった。気づくとふかふかのベッドにいた。

（騎士団長が運んでくれたのかしら？）

窓の外は既に暗く夜になっている。

掛け布団を畳んでベッドの上にのせて、部屋を出る。団長は蠟燭を灯して読書をしているようだった。甲冑を外して平服を着ている。

「起きたのか、具合はどうだ」

最初の頃には敬語だった騎士団長はポンコツなわたしに対してタメ口を話すようになっていた。それはそうか、こんなやつ敬えるはずがない。

「ご迷惑をおかけし申し訳ございません」

癖になっている公務員のときの謝罪の口調で謝った。

「ところで、君の言っていた予知の力だが。力の強い聖女に突如宿ることは時としてあるらしい。この文献にも例はあるし、現在においても他国に存在が確認されている」

一度言葉を切って、覚悟を決めたように続ける。

「そして、既に持っている癒しの力。これは国に恩恵をもたらすだろう。ただ、君がそれで不幸になるのなら。俺は国民がそれに頼るべきでないと思う。国は騎士団が、俺が守る。君は自分を犠牲にしなくていい

い。まあ、王様に知られたら一個人の不幸は犠牲にすべきというだろうが。俺は王様の覚えもいいからな」

「では、わたしの願いを叶えてくれるんですか？」

「仕方ないな。君は危なっかしくて放っておけない。俺に抱いてもらえるなんて役得だな」

こっちだって絶世の美女なのだが。がっつかない余裕は彼が掃いて捨てるほどモテている証拠だろう。

「じゃあ、早速と行こうか」

「ありがとうございますっ！　よっ！　騎士団長！　世界一！」

とは言ったものの、緊張してきた。ワインの例からして、肉体は聖女になっているのだから、破瓜の痛みは避けられない。とにかく速やかに済ませてしまいたい。前世では学生時代に付き合っていた彼と数回経験はある。が、痛いし、大して気持ちの良い行為とは思えなかった。

この騎士団長はどんな抱き方をするのだろうか？ 経験数は学生時代の彼とは段違いのはずだし、上手であることを期待したい。

贅沢は言わない、とにかく痛くさえなければ。

ベッドに横並びで体の側面を密着させて座る。肩に腕を回されて、その腕でゆつくりと背中と肩を騎士団長が撫でる。体温の高い手の温かさが薄いベールを通して伝わってくる。ほっとするような、でもこれから起こることを想像して鼓動が速まってくる。

「本当にいいんだな？ この手のことに慣れた女性ならいいが、初めてなら好いた男の方がいいんじゃないのか」

（そんな恋愛ごっこをしている悠長な暇はない。殺されてしまう。でも、騎士団長は優しい人なんだな）

「はい、あなたがいいんです。よろしくお願いします」

背中を撫でていた手が頬に回り、そのまま顔を傾けられてキスをされる。最初は触れるだけ、回数を重ねるごとにねっとり♡と貪られていく。むちゅっ♡　ちゅぱっ♡と音がする。

（どうしよう、さすが百戦錬磨、キスだけでこんなに気持ちいいなんて♡）

顔から手が腰に伸びる。腰を撫でまわされると、キスの興奮も相まってゾクゾク♡してしまう。手はさらに下がってお尻のむちむち♡とした肉を撫でられる。

「はっあ♡　いき、できない♡」

息をつこうと口を離す。

（よ、よだれ……ヴェルナー様とわたしの唇に糸引いてて……いやらしい、どうしよう）

すでに膣の奥がじんじん♡する。たまらずに膝をすり合わせてもぞもぞ♡してしまう。お尻を揉んでいた手が離れ、そのままそつとベッドに押し倒された。

前開きのベールの隙間から大きくて長い指の綺麗な手が差し込まれる。バニーガールのなレオタードの胸当て部分を掴んで引き落とされる。ぷるん♡とおっぱいが勢いよく飛び出した。

思わず両手で隠してしまう。半日ほど前は他人の体だったはずなのにみられると恥ずかしい。

「隠さないで。自慢の大きいおっぱいなんだろう？ たっぷり可愛がってやるよ」

大きな両手で掴まれてやわやわ♡と揉まれる。指の間から豊かな肉がむっちり♡とはみ出ている。

「ふうっ♡ あっ♡ っん♡」

気持ち良くて思わず息が漏れる。

「処女なのに、感度がいい。悪い聖女様だ」

からかうように言われてしまう。

「っ言わないでっ、あっ♡」

指先が胸の先端の尖りに触れたのだった。指の腹でクニクニ♡とこねられる。

「だめっ♡ そこっ♡ 気持ちよすぎて♡」

「そうか、乳首を弄られるのが好きなのか。だったらもっと触ってあげような」

そうは言っていない。言っていないのだけれど。反対の手も伸びてきて両乳首を弄られる。くにくに♡ねちねち♡といじめられたから先端が敏感に尖ってくる。尖ってきた先端を爪先でコリコリ♡って引っかかる。

（だめっ、乳首の先っぽ、ビリビリするくらい気持ちいい♡ もう、おかしくなりそう。逃げてしまいたいくらい）

コリコリ♡くにくに♡カリカリ♡

執拗な責めに乳首は完全にぴんっ♡と立ちあがってしまった。

（やだぁ♡ 乳首♡ 立っちゃった……♡ 触り方が♡）

「こんな乳首固くして。いやらしいな……」

ヴェルナー様の顔に欲情の色が見える。

（年上じゃないけれど、その気になってくれたのかな……？）

固く立ち上がった乳首をぴんっ♡ぴんっ♡と爪先で弾かれると、痺れるように快感が走って腰を浮かせて体をビクン♡って反らせてしまう。膣壺の奥からとろり♡と粘液が秘唇から溢れた。

（もう、濡れちゃってる、きっとおまんことろ♡になってる。おまんこ早く触って欲しい♡）

心を読んだかのように、ヴェルナーの手が下腹部に伸びる。レオタードのクロッチ部分は既に愛液を吸ってぐっちより♡湿っている。むわっ♡と甘酸っぱい発情した匂いを漂わせてしまう。

白いレオタードは蜜で濡れて透けている。薄い銀色の陰毛とおまんこの陰唇の形をはっきり浮き上がらせている。

「乳首弄っただけでこんなに濡れて、透けておまんこの形が丸わかりだ。処女の聖女がこんなに淫乱だとは」

「あんっ♡ 見ないでっ♡ んんっ♡ ……そんなっ♡ わたしっ♡ 淫乱じゃないですっ……♡」

手で隠そうとしても細い両手首を片手でまとめて握られてしまう。脚を閉じようとしても体を足の間にねじ込まれた。たくましい体は幅が広くてわたしの脚をはしたないほど開かせる。

レオタード濡れた布越しにおまんこをつーっ♡と撫でられる。追うかのようにとろとろ♡って奥からとめどなく蜜が溢れてくる。

「こんなに濡れて。待てないのか。よしよし、直接触ろうな」

レオタードだから、上半身と繋がっていてパンツと違って腰からずり降りて脱がすことはできない。

どうするのかなって期待混じりに待っていたら、クロッチ部分を横にずらされた。ぐちゅぐちゅ♡のおまんこが外気に触れてぞわ♡っとする。

「とろとろだ」

中指と人差し指をそろえて愛液を湛えたおまんこをぬちやぬちやつ♡
 って掻き混ぜるように撫でられる。やさしくゆっくりなのにくちゅっ♡
 くちゅっ♡っていやらしい音がしてしまう。

「やめてっ♡音、立てないでえ♡」

「無理だよ、こんなに濡れてるのに。ほら」

くちゅっ……♡ ぬちゃっ♡ くちゅう♡ ……ぐちゅっ♡ くちゅ

♡ ぬちゅ♡ ♡

わざと聞かせるように水音をたてておまんこを掻き混ぜられる。

「さっきからおまんこがべちょべちょ♡で俺の指が欲しいって言ってるみたいだ。待たせたね」

人差し指をずぶり♡とおまんこに差し込まれた。

「あっ♡ ああっ♡ んっ♡」

思わず喘いしてしまう。愛液がまたしてもくちや♡って水音を立てる。

処女の固い膣口は指一本を受け入れるのが精いっぱいだ。狭い道を指がみちみち♡って押し広げて侵入してくる異物感に耐える。

ぎりぎり痛くはない。差し込まれた人差し指は動かさず外にいる中指がくるくる♡と動きはじめる。

「えっ♡ あっ♡ なんでえ？♡」

敏感な突起を中指が捉えた。

「ひいん♡ ああ♡」

蜜でヌルヌル♡の中指がクリトリスをくるくる♡と撫でまわしている。

「だっ♡ らめっ♡ あっ♡ ゆびっ♡ いれたままなのにつ♡ クリ
っ♡ さわったら♡」

脚をじたばたして抵抗するけれど、まったくヴェルナー様は動じない。
い。

「まずは外でイこうか」

コリコリ♡ くにくに♡ くちゅっ♡ くちゅ♡ くにくに♡ コリコ
リ♡ くにくに♡

処女で感度の鈍いクリトリスを念入りにこね回す。次第にぷっくり心と勃起してしまう。遠くから泡立つような感覚がしたと思ったら、そこからはあっという間だった。

コリコリっ♡ ……くにくに♡ くちゅっ♡

「あっ♡あっ♡あぁっー♡♡」

脈が跳ねる。はぁ♡はぁ♡って肩で息をしていた。はじめてイってしまっただった。

「上手にイけたな」

額を大きな手で優しく撫でてくれる。ヴェルナー様の口調は可愛い生徒に対する先生のようなだ。本意ではないセックスのはずなのに。そんな風に見つめられると彼の虜になってしまいう女性がたくさんいるのもうなずける。

「ナカでイクのはまだ難しいだろうから、せめて痛くないといいのだ
が」

そうやってさらに体を気遣った発言をする。

（イケメンにも恋愛にもわたし興味のないのに……♡　こんなに優しくされると好きになってしまいそう……♡）

膺に差し込まれた人差し指がゆっくりと動き出した。硬く狭い膺壁を少しずつ少しずつ慎重に慣らしていく。指を曲げたり、上下に動かしたり。そのたびにくちゅ♡くちゅ♡と水音がする。

（すごく優しくされている——）

そう意識するとなぜか愛液がとろとろ♡と溢れてくる。ヴェルナー様の指を伝って、手の甲まで濡らしてしまっている。

甘く優しく膺を指でほぐされている。この人はなぜここまで優しいのだろう。そう思って緑の眼をのぞき込もうとすると目があつた。

（綺麗な瞳——まるで宝石みたい）

ふっと笑ってそのまま顔が近づいてくる。膣に指を入れられたままキスをされる。舌が唇を割って入ってきてれろれろ♡って舌を絡める。

（やさしくおまんこをぐちゃぐちゃに掻き混ぜられて♡ 舌がヌルヌル♡で♡ キス同時にされたら♡ だめっ♡ 気持ちよすぎるよお♡）

あまりに気持ち良くて蕩けそうで腰をゆらゆらと揺らしてしまう。

「そうか、良いか。じゃあ、指もう一本入れるぞ」

ぬちゃ♡って音をたててクリトリスを撫でていた中指が膣に入ってきた。

（二本目の指……♡ 簡単に入ってしまった♡ 気持ち良くて……♡ おまんこがヴェルナー様の指をちゅうちゅう♡って吸ってる……♡）

最初みたいな違和感が薄れている。とろとろ♡に濡れすぎている。

くちゅ♡　ぬちゅっ♡　くちゅっ♡　くちゅっ♡　ぐちゅっ♡

指を動かすと水音がいやらしく響く。おまんこの中はとろとろ♡で気持ち良くてとろけてしまう♡

「さあ、挿れようか」

指を抜くととろり♡と蜜が溢れた。おまんこは奥までべちよべちよに濡れて準備はできてそうだ。

（痛い怖いけど……奥、せつなくて♡ おまんこがおちんちんを欲しくなってる……♡）

ヴェルナー様が上半身の服を脱ぎ捨てる。鍛え上げた筋肉が美しく、彫刻のようだ。

次にベルトを外し、ずるん♡って勢いよくぱんぱん♡に張り詰めた怒張が姿を現す。

「やっ♡ 大きすぎっ♡ むりっ♡」

思わず声が出るほどだった。見たことないくらい大きくて、長い。ヴェルナー様は優しくて冷静だと思っていたら。猛るように勃起して反り

返っている。血管がびきびき♡って絡みついでいて優しい彼とは別人のモノのようだ。

（もしかして、彼の方も限界だった……？）

そう思うと頬が熱くなってまたおまんこが目の中の剛直を求めてきゅうきゅう♡って締まる。

腰をがちり掴まれてぬるぬる♡の割れ目に先走りが絡みついた亀頭があてがわれる。そのままぬるついた先っぽで割れ目を上下ににゅくにゅく♡って擦られた。

（両方ぬるぬる♡に濡れてて……♡ このまま滑らせたら入ってしまいそう♡）

ヴェルナー様の顔が人の悪い笑顔を浮かべている。ニヤリと笑ったか
と思っただけそのまますんっ♡って入り口を分け入ってきた。

「あっ♡ ……んう♡」

衝撃に声が漏れる。

ズズッ♡ ずちやあ♡ ズんっ♡ くちゅっ♡ ズズズッ♡

指よりも大きくて硬いおちんちんがとろとろ♡の膣に入ってくる。指
で慣らされてほぐされていたけれど、やっぱり痛い。違和感もすごい。

狭くて閉ざされている膣壁の道をミチミチ♡って割り広げて指の届かなかった奥まで侵入される。

「入ったね」

ヴェルナー様は優しく言うと、そのままわたしを抱きしめる。前世の少ない経験から考えると男性は入れたら動きたいはずだ。なのに、わたしの痛みに配慮して入れたままだ静止してくれている。動かなくても粘膜と粘膜がぬちゃぬちゃ♡って触れ合って、馴染んでいく。

（本当にこんなことで能力が消えるの……？ 失うというより、尊重されて受け入れられて満たされてる……）

「痛くないか？」気遣いにあふれた声音で囁かれ、額を優しく撫でられる。美しく整った顔がのぞき込んでくる。膣壺がきゅん♡って疼いておちんちんを締め上げてしまう。

「おまんこ吸い付いてくるな……少し動くぞ」

「えっ♡ あっ♡ 待って……♡」

「待てない。限界なんだ」

切迫したような表情が色っぽい。ヴェルナー様の顔を見たらまた柔壁がにゆるにゆる♡っておちんちんに絡みついていく。

腰を引いて、ずるるっ♡ってゆっくりと肉棒が外に引き出される。擦られながら引き出されると、ヒダヒダの壁が待って♡っていうみたいちゆうちゆう♡って収縮する。

蜜と先走りが混じった粘液にまみれた抜かれた男根を優しく膣内に戻すように差し込まれる。にゅぷ♡って奥から湧いてきた愛液が溢れる。

（初めてなのに♡ 痛いのに♡ こんな濡れて恥ずかしい♡ でも、やさしくとろとろ♡に抱かれて♡ 気持ち良くて♡ おかしくなりそう

♡
）

ゆっくりと優しい抜き差しの動きは、痛みをだんだん麻痺させていく。

ちゅぽちゅぽ♡ にゅくにゅく♡ ずぽっ♡ ずぽっ♡ ずちゅっ♡

水音がだんだん大きくなっていく。卑猥な音を立てて、淫らな行為に夢中になってしまっている。前世のわたしからは考えられなかった。

「慣れてきたな。良かった」

ヴェルナー様の指がおちんちんを咥え込んで引き伸ばされた会陰の上に伸びる。

「あっ♡ そこっ♡ だめっ♡」

ぷっくり♡と勃起しきった肉豆をくにくに♡って触られる。敏感な場所を触られて腰がびくん♡って跳ねた。

「だめっ♡ あっ♡ 挿れたままっ♡ やっ♡ クリ触るのっ♡ だっ、だめなのお♡」

「ナカでイかせてあげられないから。でも一緒にイかせてあげる」
(そんなんっ♡ 処女だし、イクなんて期待してないのに♡ ナカ擦られて、クリ同時に責められたら♡)

ヴェルナー様の腰の動きがズンズン♡って激しくなる。慣れてきて粘膜同士が蕩け合って、痛みと快感がせめぎあっている。加えてクリをク

ニクニ♡ってこねられる。クリの方は処女でも快感がはつきりわかる。波がすぐそこまでやってきているのが分かる。

「ら、だめえ♡ クリっ♡ んっ♡ ああっ♡ 気持ちいいよ♡♡ イ
っっちゃう♡ おまんこもっ♡」

膣の中の剛棒がドクドク♡って熱く脈打っているのを感じる。

「だすぞ」

「はいい♡ ヴェルナー様♡ んんっ♡ だして♡ おまんこにっ♡
全部出してえ♡」

喘ぎながら、気持ち良くて訳が分からなくなってしまっって叫ぶ。

（ナカで受け止めたい♡ こんな気持ち初めて♡）

剛莖を引き出し、腰を掴んでどちゅん♡って一際強く打ち付けられる。その瞬間に熱い精液が放たれた。

びゅるっ♡　びゅっ♡　びゅっ♡　びゅるるるっ♡　びゅるるるるる
るるるっ♡♡♡

ドクドク♡と剛直が脈打っているのが伝わって、熱い熱い精液が膣内にぶちまけられた。

「あっ♡　ああっ♡　ああああっ♡」

同時にクリでわたしは絶頂に達してしまったのだった。それは射精と全く同時で、ヴェルナー様はやっぱりとてもエッチが上手なんだなっと思った。膣からは愛液と精液と少しの血液が混じったものがこぼっ♡って割れ目から溢れていた。

「大丈夫か？」

自分のおちんぽより先に、わたしのおまんこから溢れた精液を優しく拭いてくれる。腰とおまんこがじんじんと痛い。陰部を人に拭かれるなんて恥ずかしいのだけど、ヴェルナー様が優しくついで甘えてしまう。

わたしが終わったら、彼自身も清めている。そんな後ろ姿もなんとなく目が離せず見つめてしまう。

「風邪ひくぞ、こっちにこい」

肩を引き寄せられて布団に引っ張り込まれる。裸のまま脚を絡めて、抱きしめられて、腕枕で頭を撫でられる。彼の香りは香水より頭をクラクラさせる。

（何なの、アフターケアまで完璧でずるい……）

彼が優しく、体温が暖かくてそのままウトウトと眠ってしまった。

明け方に目が覚めた。ヴェルナー様は腕枕をしたまま寝ている。わたしは目が冴えてしまっている。目だけではなく、聴覚や他の感覚まで冴えわたっている気がする。

たかがセックスとと思っていたのに。ヴェルナー様に優しく抱かれてしまった。公務員時代は誰からも尊重されなかった。聖女に転生して、優しく氣遣われて尊重される喜びを知ってしまった。生まれてはじめて満たされた気がした。

（そう、満たされた。わたし、今ならなんでもできる気がする）

目をカッと開き、溢れる気力を手のひらに集中させた。なぜそんなことをしようと思ったかはわからない。なぜか、そうしなければならい
と思った。

その瞬間に手のひらから光がほとばしった。熱源となった光が手のひらに集約したと思ったら、手から飛び出して行った。

どっかーん！

爆発音がした。わたしはあっけにとられて動けない。

「なんだっ!？」

さすがは騎士団長、姿勢を低くしながらわたしをかばい、片手で素早く服を身に付けている。

光が消えた方角を見ると、朝日が見えた。壁のあるはずだった部屋の前方から壁が消えて、朝日どころか野外の風景がすべて目視できるようになっていた。

わたしは強大な力のビーム的なものを出せるようになっていたのだった。

そして、あんなにお世話になった恩人の家を破壊してしまった。

第二章 能力大覚醒からの秘密の特訓

（おかしなことになっちゃったわ）

状況を整理してみよう。聖女の癒しの力を失うために騎士団長に抱かれたら、あまりに気持ち良すぎて満たされまくって破壊の力が目覚めてしまったのだ。女性はエッチしたら綺麗になるとかいう都市伝説があるが、それどころではない劇的な効果だ。

やり方を習わなくても分かる。力を集中して、十分に溜まった時点で放つのだ。

せつかくなら、決め台詞も考えよう。わたしは子どもの頃、女児アニメが好きだった。

気づけばすっかり原作の小説のストーリーを改変している。

魔王に攫われるはずのいたいけな聖女が手からビームを出すなんて、要素が盛り込み過ぎで收拾がつかないだろう。

ただ、事態を整理してみても心に決めたことがある。

前世では一介の公務員で。謝ってばかりの毎日だった。震災の対応をしたときに、一人の力では大災害を前に無力であることを突きつけられた。

（わたしの手で悲劇を回避できる可能性があるのなら、やるべきだわ）
一部始終を見ていて目覚めた力のことを知っているヴェルナー様に宣言する。

「自分だけが助かる気でした。恥ずかしいです。この力があれば、わたしは魔王を倒します」

彼には死の結末から助かりたくて無理なお願いをしてしまった。でも力を手に入れたのだから一人でやれる。これ以上、巻き込むつもりはない。優しい彼に迷惑は掛けられない。

「なんでそうなる!? でも君の力は本物だ。俺の経験から見てもあれほどの力があれば魔王を倒せる見込みはある」

ヴェルナー様は本当にいい人だった。さすが女たらしでも騎士団長を任されるだけの人望のある人物だ。家を破壊したわたしを責めず、目覚めた力の方を気にかけた。

「本当は女性を危険な目には遭わせたくない。だから魔王討伐に向けて少しでも力を高めよう。今日から特訓をはじめろぞ」

「そんな、これ以上迷惑をかけるわけには……」

「何を言っている。乗り掛かった舟だ。魔王討伐は我ら騎士団にとっても悲願だ。力を惜しむ騎士がどこにいる」

胸が熱くなる。正直心細かった。すぐに意志を翻してしまったが、ヴェルナー様と一緒に戦えるのなら心強い。

「ありがとうございます。ところで特訓とは？ 剣術ですか？ 魔法訓練ですか？ わたし、なんだって乗り越えてみせます。世界を救うためなら」

いつになくやる気で宣言する。

「能力が覚醒したきっかけを色々なやり方で反復しよう、何が効くのかわかるはずだ」

「って、それって!? もしやセックス!?」

「それしかないだろう。今日から毎夜試していくぞ」

冗談ではないらしい。魔王を倒すための特訓で毎夜ヴェルナー様とセックスするのだ。

（なんてことなの!? わたし、どうなっちゃうの?）

ヴェルナー様の提案で教会から身の回りの荷物を引き上げて彼の住居へ引っ越してきた。

（一緒に暮らして、毎夜エッチするのよね……。これが修行なんて。意味が分からない展開になってしまったわ……）

単なる修行と言い聞かせるけれど、なんとなく浮足立ってそわそわしてしまふ。

引っ越してきたその日からセックスによる魔力の特訓がはじまった。